

心の理論と共同注視－自閉症児に欠落しているもの

2009/11/22 福岡定例会
藤坂龍司

1. 心の理論

(1) 心の理論とは

私たちは、内心の願望が行動を引き起こすと考えている。

| | | |
|----------|---|---------|
| 願望 | | 行動 |
| アイスが食べたい | → | アイスを食べる |

私たちは願望だけでなく、人の信念（内心の認識）がその人の行動を左右すると考えている。

| | | | | |
|----------|---|------------|---|--------|
| 願望 | | 信念 | | 行動 |
| アイスが食べたい | + | 冷蔵庫にアイスがある | → | 冷蔵庫を探す |

私たちは人が間違った信念（認識）を持っている場合でも、人はその信念に従って行動する、ということを理解している（誤信念）。

| | | | | |
|----------|---|--------------|---|--------|
| 願望 | | 誤信念 | | 行動 |
| アイスが食べたい | + | 冷蔵庫にアイスがあるはず | → | 冷蔵庫を探す |

このように私たちは心の中の状態（願望、感情、信念）が人の行動を引き起こすと考えており、その理解を人の行動の説明や予測に使っている。言わば私たちは素朴な素人心理学者であり、心の働きについて一応の「理論」（理解）を持って、人の行動の分析に用いている。

この一般の人による心の理解を「心の理論（A Theory of Mind）」と呼ぶ。

動物心理学者のプレマックとウッドラフは、1978年の論文で、チンパンジーも「心の理論」を持っていると主張した。

彼らの観察によると、チンパンジーは上位のチンパンジーが餌に気づかないように、そのチンパンジーが通り過ぎる間、わざとえさとは違う方向を見る、という行動を取る。

これはチンパンジーが他のチンパンジーの心を理解しており、その認識をあやまらせる（つまり騙す）ことによって、その行動をコントロールできると考えているからだ、とプレマックらは主張した。

この論文以降、人や動物の心の理論に関する研究が盛んになった。その一つが、健常の幼児はいつごろから心の理論を身につけるようになるのか、という問題である。

(2) 健常児による心の理論の獲得

< 2才児 >

2才児に「これをパパに見せて」というと、ちゃんと父親の視野に入るようにその物を持っていくことができる。つまり2才児は「自分の見えるものでも他人が見えるとは限らない」ということを理解している。

また2才児は、「したい」から「する」のだ、ということ、つまり願望が行動を引き起こすことを理解している。（「どうしてこの子は冷蔵庫を探しているの?」「チョコがほしいから」）

< 3才児 >

3才児になると精神世界と現実世界の区別がはっきりしてくる。「ふり」と現実を混同することがなくなり、「思う」「考える」という言葉を正確に使えるようになる。

3才児は「見る」と「知る」の関係を理解している。つまり箱の中を覗いた人だけが、その箱の中身を知っている、ということがわかる。

また3才児は願望だけでなく、信念が人の行動を左右する、ということを理解する。「アイスがほしい」（願望）だけでなく、「アイスは冷蔵庫にあると思っている」（信念）から冷蔵庫を探すのだ、ということがわかる（「この子はどうして冷蔵庫を探しているの?」「アイスがほしいから。冷蔵庫にあると思っているから」）

しかしこの段階ではまだ、事実と信念ははっきり分離されていない。3才児は、その冷蔵庫にアイスがないことを自分が知っている場合、それでも他の人が、そこにアイスがあると信じて探している、ということがあり得る、ということが理解できない。

「冷蔵庫にあると思っていないよ。だって冷蔵庫にはないんだもん」

< 4～5才児 >

4～5才になると、信念が現実と違っている場合でも、人は現実と異なる信念に従って行動する、ということを理解するようになる（誤信念）。つまり本当は冷蔵庫にアイスがなくても、アイスがあると考えている人は冷蔵庫を探す、ということを理解する。

「本当はないんだけど、この子はあると思ってるの」

認知心理学者は、この段階を持って、子どもが「心の理論」を獲得する、と考えている。

(3) 自閉症児と心の理論

1985年、バロン＝コーエンらは、この誤信念に関する「サリー・アン」課題を、自閉症児、ダウン症児、健常児の3グループに実施した。

「サリー・アン」課題

サリーはおはじきをバスケットに隠して出かけました。サリーが出かけた後、アンはバスケットからおはじきを取りだし、箱に入れてふたをしました。サリーがかえってきました。サリーはおはじきで遊ぼうと思いました。サリーはバスケットと箱のどちらを探すでしょう。

その結果、ほぼ同じ精神年齢（3～4才）にあるダウン症児と健常児がこの課題を通過したのに対して、それより高い精神年齢を持つ自閉症児の65～80%が通過できなかった。

バロン・コーエンらはこの結果を持って、心の理論の欠落が、自閉症児の障害の中核にあると主張した。

2. 共同注視（ジョイント・アテンション）

物に関する関心や感動を他人と共有するためのジェスチャ（指さしや目合わせ）をすること。あるいは他人の指さしや視線の先を追うこと。

心の理論と同じく、自閉症児に大きく欠落している、とされる。しかも健常児においては、心の理論の獲得よりもずっと早く、6～12カ月でこの行動が出現する。

自閉症児は受動的共同注視の能力はある程度持っているが、能動的共同注視は顕著に欠落している。

①受動的共同注視

他人の、物への関心を共有するためのジェスチャに反応すること

例：相手が指さした方向を見る。相手が見た方向を見る

「お母さんは何を見てるんだろう」

②能動的共同注視

子どもの側から自発的に、他人と物との関心を共有するためのジェスチャをすること。

例：興味のある物を指さして、そばにいる人の顔を見る。興味のある物を親などに見せる。

「お母さん、見て」

いずれも、「お母さんが見ているものは自分が見ているものと違う」という漠然とした認識（心の理論の芽生え？）が必要となるだろう。しかし能動的共同注視には、さらに、「お母さんに見てほしい」という気持ち（共感を求める欲求）も必要となるはず。

3. 心の理論と共同注視をつなぐもの

（1）より根底にある障害？

逆さバイバイ → 「自分と向かい合う存在」として他者を見る能力（対自的他人理解）の欠落？

クレーン現象 → 「意図を持った他者」理解の欠落？

心の理論（理解）や共同注視の欠落は、おそらくより広範な社会性の障害の一部。それだけを取り出して教えても、根本的解決にはおそらくならない。

（2）ではどうしたら？

より広汎な社会性の諸障害に、一つずつ対処する。

<対自的他人理解>

動作模倣：相手が相手に対して行った動作を、あなたもあなたに向かってする

やり返し：相手があなたに対して行った動作を、あなたも相手に向かってする

<「意図を持った他者」の理解>

人の指示を理解し、それに従うことを教える

感情を込めてほめ、時には叱る

<「人を好きになる」>

笑顔で心からほめる。と同時にお菓子、ビデオなど、効き目の確かな強化子を同時に与える。

(3) 共同注視の教え方

<受動的共同注視>

大人の指さしや視線の向く方におかしやおもちゃなどの強化子を置いておく。

子どもがそちらをみたら、強化子を与える。

<能動的共同注視>

①まず「目合わせ」「笑顔」「ほめことば」とおかしなどの強化子を一緒に与えることで、目合わせや笑顔、ほめことばを好きにさせる。

②子どもが何かに興味や驚きを持ったときに、目合わせや優しい声かけをする

「ひこうきだねえ」

(4) 心の理論（理解）の育て方

まず「見える」「わかる」「知る」などの知覚動詞の理解から。そのうえで、他者が見えるもの、知っているものは自分とは違うということ、の理解を促す。

<教え方>

①見える・見えない

下敷きのこちら側にキリンを隠し、首や足などを子どもから見えるようにする。

子どもに「見える？」と聞き、「見える／見えない」と答えさせる。

②ママは何が見える？

下敷きのこちら側と向こう側に違うものを置く。

「○○ちゃんは何が見える？」「ママは何が見える？」

③ママに見えるかな？

下敷きの子ども側に物を置き、「○○ちゃん、○○見える？」「見える」「じゃ、ママに○○見えるかな」「見えない」

④隠す

・お母さんが見えないところに隠す

・お母さんが見ていないうちに隠す

・自分から教えない

⑤知ってる・知らない

箱の中に物を入れてふたをする。「見える？」「見えない」

「じゃ、この中に何があるか、知ってる？」「知らない」

中身を見せる。「見えた？」「見えた」「じゃ、この中に何があるか、知ってる？」「知ってる」

「何？」「○○」

⑥ママは知ってる？

子どもにだけ箱の中を見に行かせる。「○○ちゃん、箱の中に何があるか、知ってる？」「知ってる」「ママは知ってるかな」「知らない」

お母さんだけ見に行く。

二人で見に行く。

⑦嘘をつく

2つの箱の片方にお菓子を入れておく。パパがやってきて、「お菓子、どっちにあるの？」と聞く。子どもにわざと違う方を教えさせる。パパが行ってしまった後、お菓子を食べられる。